脱従属化と意味変化
(Insubordination and Semantic Change)

前田　満

1．序論

世界のたいていの言語にはもともと補文であった節が主節として使われるケースが見られる。このような「主節化」された補文を以後、「独立補文」(independent complement clause、略してICC)と呼ぶ。例えば、ブルガリア語やクロアチア語など、南スラブ語に広く分布する「独立da構文」[1]がある((1)はブルガリア語の例)。[2]

(1) Da vi predstavja žena si.[3]
DA you:Dat introduce:1sg wife my
'Let me introduce you to my wife.' (Papantchev (1994: 41))

独立da構文はたんに主節の省略により生じた発話の断片ではない。ICCはそれ自体が独立の構文とみなされ、談話機能の観点からすると、特別な発話行為(speech act)に関連した働きをもつものが多い。3.1節で論ずるように、да(da)節は、英語のto不定詞(*to*-infinitive)に近い働きがあり、典型的には「命令」「指示」「願望」などを表す動詞の補部(complement)として用いられる。このような環境におかれたда節は未実現の行為(unrealized action)または非事実的な(non-factual)事象を表すにすぎない。これに較べると、(1)の文はずっと豊かな解釈をもっている。英訳に示したとおり、この文は英語の "Let me ..."「～させて下さい」の発話形式に相当する遂行文(performative)とみなしうる。つまりそれ自体が他に依存しない独立の談話機能をもつといえるのである。

本論の目的は(1)に示した独立da構文をとりあげ、ICCがなぜ、そしてどのようにして生じてきたかを明らかにすることである。ICCの発達はもちろん統語論的な観点からも重要だが、本論の分析の焦点は構造変化ではなく[4]、むしろICCの発達にともなう意味変化に注目する。先ほどふれたдаはもともとto不定詞のtoにあたる補文標識(complementizer)であり、本来特別な意味内容はもたないが、(1)の文ではおよそletに近い意味をもつ。

つまり、独立 da 構文成立の過程で да はもともとの用法になかった新たな意味を獲得したことになる。独立 da 構文にかぎらず、一般に ICC は意味変化の結果生ずるものと考えられる。したがって、ICC 発達の契機となる意味変化のメカニズムを解明することが、ICC の本質を理解する鍵となる。この意味変化のメカニズムこそがこれまでに筆者が「意味憑依」(meaning possession) と呼んできた特別な意味変化のパタンであることを示すのが本論の主な論点である。

本論の構成は次のとおり。2 節では、独立 da 構文の主な特性を、遂行性 (performativity) と構文性 (constructionality) を中心において概観する。3 節では独立 da 構文の共時的な分析を行う。まず3.1節では、補文としての да 節の分布を示したうえで、独立 da 構文が主節の脱落により生じた ICC であることを示す。3.2節では、独立 da 構文の 4 つの用法の談話機能と解釈について考察し、それらが 'I want X to happen' という独立 da 構文の基本的意味構造と да 節の動詞の人称・数の相互作用から生まれると主張する。4 節では、'I want X to happen' という意味構造がどのような過程をへて生まれたかを通時的な視点から考察する。この意味発達において鍵となる役割を果たしたのが意味憑依だと考えられる。そこで4.1節では、まずフランス語の否定辞 pas の意味発達を通じて意味憑依のメカニズムについて概観し、4.2節で独立 da 構文の分析に移る。5 節は本論のまとめである。

2. 独立 da 構文

この節では、先ほど (1) にあげた独立 da 構文の主な特性を概観する。そこでまず独立da構文について簡単に紹介しておきたい。(1) の文は、英訳に示したように、英語の'Let me ...'のタイプの命令文に相当し、聞き手に何かを申し出るさいに用いられる。他にも英語の'Let's ...' に相当する (2a) のような用法、そして命令文に近い (2b) の用法がある。

(2) a. *Da* otidem na pazara!
　　DA go:1pl to market:Def
　　'Let's go to the market.' (Holman and Kovatcheva (1993: 114))
　b. Molja *da* osvobodite stajata.
　　please DA set-free:2pl room:Def
　　'Check out, please [lit. Please set free the room].'

これに加え、独立 da 構文には (3) に示す英語の 'May ...' の構文に相当する祈願文としての用法がある。

(3) *Da* ste živi i zdravi!
DA be:2pl alive:pl and healthy:pl
'May you be well and healthy!' (Alexander (2000: 225))

さて、ここで да について少々述べておこう。補文における да はもともと補文標識である(3.1節を参照)。したがって、その本来の文法機能は補文を導入するという、Halliday(1995)の意味における「テクスト機能」(textual function)である。これに対し、独立 da 構文の да は let や命令法に近い働きと意味をもっている。後者の働きはもはやテクスト機能ではなく、Halliday がいう「対人的機能」(interpersonal function)に該当する。

2. 1. 談話機能

まず、独立 da 構文の談話機能に注目したい。興味深い点は、この ICC が発話行為と強く結びついた構文であるという点である。例えば、次にくり返す(1)の да は補文標識であるのと同時に発語内の力(illocutionary force)[5]を明示化する働きをもっている。

(1) Da vi predstavja žena si.
DA you:Acc introduce:1sg wife my
'Let me introduce my wife to you.' (Papantchev (1994: 41))

具体的には、この文は「申し出」(offering)という行為にともなって発話され、да の存在は文がたんに状況や行為の描写でないことを合図している。試みに(1)から да をとり除くと、文の解釈は大きく変化する。(1)'を参照。

(1)' Predstavja vi žena si.
introduce:1sg you:Dat wife my
'I'll introduce my wife to you.'

つまり、(1)は英語の "Let me ..." の発話形式に相当する遂行文(performative sentence)なのである。Searle (1969)は発語内の力を明示する働きのある表現を「発語内の力の指標」(illocutionary force indicator)と呼んだ。独立 da 構文の да はまさしく発語内の力の指標の好例であるといえる。つまり、独立 da 構文はもっぱら発話行為の遂行のために特殊化した構文なのである。

さて、今しがた(1)の文は遂行文であると述べたが、Austin (1975)などで指摘されているとおり、遂行文には顕示的遂行文(explicit performative)と非顕示的遂行文(inexplicit performative)がある。前者は promise、order、warn といったいわゆる遂行動詞(performative verb)をもち、遂行される発

話行為の性質が明示されるタイプの遂行文である。いっぽう後者では発話行為の性質は明示されない。ここで、(4a)と(4b)を比較してみたい。

(4) a. I promise I'll never late again.
　　b. I'll never late again.

(4b)は「約束」を行う遂行文としても働きうるが、場合によるとただ決意を述べているものとも理解できる。いっぽう(4a)のような顕示的遂行文では、一般に発話が半自動的に発話行為と理解される(Searle (1989))。この顕示的遂行文の性質を遂行性(performativity)と呼ぶ。Sweetser (2000: 306)によれば、遂行性は「外見上発話行為の描写と思われる発話が当該の発話行為の遂行とみなされる現象」と定義される。よって(4a)の例は文字どおりには単なる行為の自己説明的(self-referential)な描写にすぎないが、"I promise ..." の発話形式がもつ遂行性のため半自動的に「約束」を遂行しているものと理解される。

先ほどあげた遂行性の定義は、基本的に顕示的遂行文にしか適用できないので、そのままでは本論の扱う ICC は対象外となる。だが、内田・前田(近刊)でも指摘したように、解釈パタンという観点からすると顕示的遂行文に近い非顕示的遂行文も決して少なくない。例えば、挨拶に用いられる慣用句について考えてみよう。かりにブルガリア語について何も知らない外国人が(5)のような表現をブルガリア人のいるところで口にしたとする。

(5) Dovižđane.
　　'Good-bye.'

話し手にいとまごいをしようという意図がなかったとしても、ブルガリア人にとってこの発話は半自動的に「挨拶」の遂行とみなされるだろう。だがこの文には遂行動詞のように発語内の力を顕示化するような表現は含まれていない。したがって、定義上、この文は顕示的遂行文とはならない。だが、内田・前田 (近刊)で筆者が指摘したとおり、このタイプの文では慣習が遂行動詞の役割を果たしているのである。そこで、ここでも遂行性という術語の適用範囲を若干拡張し、このような慣習的な表現法に対しても遂行性という概念を適用することにしたい。すると、独立 da 構文にも遂行性という概念を適用する道が開ける。

独立 da 構文でも発話により半自動的に発語内の力が生ずる。いってみれば顕示的遂行文に準ずる特性をもっているのである。したがって、これらに対して遂行性を認めたとしてもさして問題は生じない。ただし独立 da 構文の場合には何が発語内の力を顕示化しているのかという問題が残る。この場

合、挨拶の慣用句のように、たんに慣習だけが顕示化の働きをしていると考えるのはやや苦しい。なぜなら、後の節で見るように、独立 da 構文の解釈は挨拶の慣用句ほど固定されてもいないし、自動的でもないからである。じつはこの問題は本論の主要なテーマと関連が深いので、詳しい議論は4.2節にゆずり、ここではこれ以上の詮索はしない。ともあれ、ここで重要な点は、独立 da 構文が解釈に関して顕示的遂行文に近いものであるということである。

さらにもう一点、遂行性について論じておきたい。Wierzbicka (1987) が指摘するように、遂行性には程度の差がある。つまり、遂行文がどれほど自動的に発話行為の遂行と理解されるかには様々な程度があるということである。例えば、挨拶の慣用句のようなものは、もっとも自動的な部類に属し、この点において顕示的遂行文をしのいでいるとさえいえる。いっぽう (4a) のような発話形式は半自動的に発話行為の遂行になるとはいえ、コンテクストによってはたんなる断定陳述文と理解されうる。つまり、その分遂行性は低いのである。また 'I'm sorry ...' のような発話形式ではさらに遂行性は低く、(6a) のように 'I apologize ...' と同じく「謝罪」と理解されることもあれば、(6b) のように単に遺憾の意を表しているものと理解される場合もある。

(6) a. I'm sorry I wasn't much help.
　　b. I'm sorry about your husband.

このタイプの発話形式は遂行性が低いと判断される。

さて、以上の考察を念頭において、今度は独立 da 構文について考えてみよう。先ほど見たように、独立 da 構文はもっぱら遂行文として用いられ、けっして命題の断定陳述とは理解されない。したがって、独立 da 構文も遂行性がきわめて高い発話形式ということになる。この特性は 'I'm sorry ...' や "I promise ..." というより (7) のような挨拶表現に近い。挨拶表現もまた断定陳述の働きをもたないからである。つまり、独立 da 構文も挨拶表現も特定の発話行為に特化した発話形式なのである。以後、このような発話形式を「発話行為構文」(speech act construction、SAC) と呼ぶ。

2. 2. 構文性

前節で見たように、独立 da 構文は特定の発話行為遂行のために特化した発話行為構文 (SAC) とみなしうる。これは Kay (1997) や Fillmore et al. (1988) のいう「文法構文」(grammatical construction、GC) の 1 例と考え

ることができる。文法構文とは、その統語構造もしくは解釈が共時的な規範・規則からの逸脱を示す発話パタン(utterance pattern)である。次に Goldberg (1995: 4)による GC の定義をあげる。

(7) C is a CONSTRUCTION iff_{def} C is a form-meaning pair $< F_i, S_i >$ such that some aspect of F_i or some aspect of Si is not strictly predictable from C's component parts or from other previously established constructions.

上掲の文献では詳しく論じられていないが、GC の中には化石化した過去の構造や、省略語法や特定のコロケーションが固定化したものなど、言語変化の結果生ずるものが多い。(8)は Fillmore et al. (1988)のあげる GC の例である。

(8) a. The bigger they come, the harder they fall.
b. Him be a doctor?
c. Why not fix it yourself.
d. One more and I'll leave

どれも日常的に使われる発話パタンばかりだが、いずれも何らかの点で構造的あるいは意味的に文法規範から逸脱している。まず(8b)の文を見てみよう。この文の主語は目的格でしかも動詞は原型のままであるから、明らかに共時的な統語規則にそむいている。(8a)の構造もやはり現代英語では規格外といわざるをえないだろう。これに対し、(8c)と(8d)をある種の省略語法だと考えるなら、さほど構造的に逸脱しているとはいえないかもしれない。例えば、(8c)は(8c')の短縮形と考えられる。

(8c') Why don't you fix it yourself?

だが、Levinson(1983: 267)が指摘するように、"Why not ...?" と "Why don't you ...?" では解釈の違いがある。つまり、(8c')に「示唆」の解釈と理由を尋ねる通常の疑問文の解釈があるのに対し、(8c)には前者の解釈しかない。この解釈の違いは、"Why not ...?" がすでに "Why don't you ...?"から構文的に分岐し、しだいに「示唆」の遂行のために特化した独立の SAC への道を歩んでいることを示している。また、(8d)の場合も、表層構造からは想像しにくいが、条件文(conditional)に近い働きをもっている。つまり、(8d)は例えば "If I drink a cup of coffee, I'll leave" のように解釈される。この解釈は(8d)を構成する語彙項目の意味から予測できない。(7)の定義によると、こうした解釈的な逸脱も GC 認定の決め手となる。

さて、本節の主題である構文性(constructionality)とは、「発話パタン U

が言語変化とその慣習化により通常の文法規範(規則)から逸脱し、GCとしての独立性を高める度あい」のことを意味する。遂行性の場合とまったく同様に、構文性にも程度の差がある。(8)のうちもっとも構文性の低いものはおそらく(8c)である。(8c)は構造的にも "Why don't you ...?" からdoの省略[6]により生じたことは明らかで、しかも少なくとも「示唆」を表すという点で "Why don't you ...?" と共通している。いっぽう(8a)と(8b)は構造的にも解釈的にも著しく規範から逸脱しており、この点で構文性がきわめて高いと思われる。とくに(8a)は慣習がなければ共時的には何も意味を成しえないほどである。

GCそして構文性という概念をご理解いただいたところで、今度は独立da構文の構文性の度あいについて考える。まず構造的に考えると、補文が主節動詞(main verb)と切り離され、単独で発話されるということは、少なくとも文法規範にてらして正常な状態ではない。じっさい省略語法として理解できないコンテクストでは、補文だけを発話することは許されない。(9)のやりとりを考えてみよう。

(9) *Da* četa li? — Da, četi.
Comp read:Pres:1sg Q Yes read:Imp:2sg
'To read? — Yeah, read.' (山崎 (1985: 88))

(9)の最初の発話は見た目には独立da構文に類似しているが、これは単に主節が省略されたものにすぎない。この文が適正に解釈されるためには、主節の意味内容を暗示する表現が先行する発話の中に含まれているか、(10)のように、それを明示するようなコンテクストがなくてはならない。

(10) Trjabva da četeš tazi kniga.
must:3sg DA read:2sg this book
'You must read this book.'

次に(11)の例を考えてみよう。

(11) A: Archie, you promised me.
B: That's right, Betty. I did ... *To experience the thrill of a slam dunk by my side.*

(11)の強調を施した不定詞節には主節が欠けている。しかし、Aの発話中のyou promised me「約束してくれたでしょ」があるので、聞き手はすぐさま不定詞節の欠けた主節がI promised youであると同定できる。つまり、Aの発話がなければBの発話の適正な解釈は得られないのである。これは一般に省略には復元可能性(recoverability)の制約が課されるからである(cf.

Sag (1980: 16))。(11)の強調部分は主節の削除によって生じた発話の断片と考えてよい。

いっぽう独立 da 構文は単なる省略語法あるいは主節の削除とは考えられない。独立 da 構文は通常欠けた主節の意味内容が復元不可能なコンテクストで発話される。(12)を考えてみよう。

(12) A: Nadja, ela!　　Tuk ima　　svobodna masa.
Nadja, come:Imp here have:3sg vacant　table
'Nadya, come here! Here is a vacant table.'
B: Ne običam　da sjadam do vratata.
Neg like:1sg DA sit:1sg by door:Def
'I don't like sitting by the door.'
A: *Hajde da sednem do prozoretsa　togava.*
DM　DA sit:1pl　by window:Def then
'Come on, let's sit by the window then.'
B: Dobre.
well
'Okay.'　　(Holman and Kovatcheva (1993: 179))

(12)の独立 da 構文に先行する話者 A と話者 B の発話には、欠けた主節に相当するものはない。直前の B の発話に含まれる не обичам (ne običam) 'I don't like' は да 補文を従えてはいるが、強調部分の主節としては意味的にふさわしくない。つまり、独立 da 構文は単なる主節の省略と異なり、復元可能性の制約に従わない。にもかかわらず、独立 da 構文には主節があるかのような解釈がある(3.2節)。これは独立 da 構文に特有のふるまいである。

次に意味的な側面について考えてみたい。独立 da 構文の意味的特性は、2.1節で見たように、高い遂行性を示すこと、そして通常の да 補文よりも解釈が豊かであるという点である。後者の点については 3 節で詳しく論ずるので、ここでは前者の特性について考えてみよう。まず、補文としての да 節それ自体は発語内の力をもたない。

(13) Predlagam　da otidem　na Vitoša.
suggest:1sg DA go:1pl　to Vitosha
'I suggest we go to Mt. Vitosha.'
(Holman and Kovatcheva (1993: 155)

(13)の発話が「示唆」の力をもつ理由は主節の遂行動詞 предлагам

(predlagam) 'suggest' があるからで、補文とは基本的に無関係である。つまり、да 節が遂行性をもつのは ICC として用いられる場合のみなのである。

以上の議論をまとめると、まず①通常の主節の省略と異なり、独立 da 構文の発話は復元可能性の制約に従わない。②主節をもたない補文は文法規範から逸脱している。そして③独立 da 構文は通常の да 補文と解釈的に異なる。これら3点から、筆者は独立 da 構文を GC と位置づけたい。次節では、本節の結論を念頭において、独立 da 構文の共時的特性についてもう少し踏みこんで考える。

3. 独立 da 構文

本節では、独立 da 構文の共時的特性ついてもう少し詳しく調べる。まず3.1節では補文としての да 節の分布を示し、独立 da 構文が補文に由来する ICC であることを確認する。次に3.2節では、独立 da 構文を発話行為の観点から 4 つの用法に分類し、それらがいずれも 'I want X to happen' という基本的意味構造を仮定することによって説明できることを示す。

3. 1. 独立 da 構文と да 節

独立 da 構文はブルガリア語をはじめ、セルビア語、クロアチア語、マケドニア語など、いわゆる南スラブ諸語に広く分布する。しかし本節では、紙数の関係上、ブルガリア語の独立 da 構文に基づいて議論を進める。[7]

まず、補文としての да 節本来の用法に注目したい。да は補文標識のひとつである。ブルガリア語では、英語の think に相当する мисля (mislja) などのとる名詞節 (noun clause) では、別の補文標識 че (če) が用いられる。いっぽう да はおもに英語の不定詞が生起する環境で用いられる (Alexander (2000: 81))。[8] このため、ブルガリア語には英語に見られるような、動詞や助動詞に直接不定詞が後続するような構文は存在しない。それどころか、ブルガリア語は英語の不定詞に相当する語形さえもたない。[9] да と動詞の組み合わせはしばしば英語の to 不定詞を彷彿とさせるが、(1) の例からもわかるように、да に続く動詞は屈折を示す定形動詞 (finite verb) である。да 節の主語は通常表現されないが、これはブルガリア語が主語代名詞の省略を許す言語だからにすぎない。

では、да 補文の具体例を見てみよう。次に示すとおり、да 補文は意味上の主語 (14) や前置詞の目的語 (15g)、目的節 (16) などとしても用いられ、助動詞や動詞の後にも現れる (15)。また、すでに若干ふれたが (17) のようにい

わゆる遂行動詞(performative verb)も да 補文をとる。

(14) a. Naj-dobre e *da* otidete na pazara.
Spr:good be:3sg DA go:2pl to market:Def
'It's best to go to the market.'
(Holman and Kovatcheva (1993: 105))

b. Hubavo e *da* se običat.
nice be:3sg DA Refl love:3pl
'It's wonderful to love each other.' (山崎 (1985: 72)

c. Mislja če šte e hubavo *da* prekarame
Think:1sg Comp Fut be:3sg nice DA spend:1pl
otpuskata v Balgaria.
vacation:Def in Bulgaria
'I think it will be nice to spend our vacation in Bulgaria.'
(Alexander (2000: 128))

(15) a. Ne običam *da* čakam.
Neg like:1sg DA wait:1sg
'I don't like waiting.' (Holman and Kovatcheva (1993: 179))

b. Iskate li *da* tragvame?
want:2pl Q DA go:1pl
'Do you want to go with us?' (Papantchev (1994: 39))

c. Trjabva *da* otida v Plovdiv.
have-to:3sg DA go:1sg to Plovdiv.
'I have to go to Plovdiv.' (Holman and Kovatcheva (1993: 97))

d. Započnah *da* uča balgarski.
begin:Past:1sg DA study:1sg Bulgarian
'I began to study Bulgarian.' (山崎 (1985: 72))

e. Njama *da* ti kaža.
Neg+have:3sg DA you:2sg say:1sg
'I won't tell you.' (Ibid.)

f. Moga li *da* Vi usluža s nešto?
can:1sg Q DA you:2pl service with something
'Can I do anything for you?' (Papantchev (1994: 41))

g. As njamam ništo protiv *da* pazaruvam.
I Neg+have:1sg nothing against DA go-shopping:1sg

'I don't hate going shopping.'
(Holman and Kovatcheva (1993: 106))

(16) a. Za *da* poluči bezplaten savet, ...
for DA receive:3sg free counsel
'In order to get a free consultation, ...' (山崎 (1985: 73))

b. ... za *da* te vidi
for DA you:Acc see:3sg
'... in order to see you.' (Holman and Kovatcheva (1993: 179))

(17) a. Pozvolete mi *da* Vi predstavja gospožtsa Boneva.
allow:2pl me:Dat DA you:Dat introduce:1sg Miss Boneva
'Allow me to introduce Miss Boneva to you.'
(Papantchev (1994: 41))

b. Kazah mu *da* se varne.
Say:Past:1sg him:Dat DA Refl go:3sg
'I told him to go back.' (山崎 (1985: 73))

c. Predlagam *da* otidete v Melnik.
suggest:1sg DA go:2sg to Melnik
'I suggest you go to Melnik.'
(Holman and Kovatcheva (1993: 155)

以上のように、da 補文にも様々な用法があるが、ここで特に重要となるのは(15)の名詞節や(17)の発話行為動詞の補部での用法である。なぜなら、これらの文のいくつかは遂行文として用いられるからである。独立 da 構文が発話行為に特化した SAC であることを想起されたい。

ともあれ、独立 da 構文をのぞけば да 節は常に従属節として用いられる。この点を考えると、独立 da 構文がもともと独立節(independent clause)であったという可能性はきわめて低いといわざるをえない。つまり、もともと独立節であった да 節がしだいに従属節として用いられるようになったとは考えにくいのである。むしろ従属節であった да 節が主節の脱落により主節に「格上げ」されたものと考えるべきであり、これは直感にもかなっている。このタイプの統語発達は Evans (1988)が「脱従属化」(insubordination)と呼び、Givón (1995: 143)が「統語的遊離」(syntactic liberation)と呼ぶ現象である。[10] しかし文献では脱従属化がどのようなメカニズムで生じたかについて十分な議論がなされていない。この問題については 4 節で再びとりあげる。

3. 2. 独立 da 構文の 4 つの用法

次に独立 da 構文の用法を類型化してみたい。もっとも頻度の高い用法は、英語の 'Let's …' の発話形式に相当する用法で、聞き手を勧誘するさいに用いられる。(18) では да 節の動詞の人称が 1 人称複数となっていることに注目してほしい。つまり、(18a) の文は英語の語彙を用いて表すとおよそ 'That we go to the market' のような構造をしている。以後、この用法の独立 da 構文を「勧奨用法」(hortative use) と呼ぶ。

(18) a. *Da* otidem　na　pazara!
　　DA go:1pl　to　market:Def
　　'Let's go to the market.' (Holman and Kovatcheva (1993: 114))
　b. *Da*　se　zapoznaem!
　　DA　Refl　Get-acquainted:1pl
　　'Let's get acquainted.' (Ibid.: 56)
　c. *Da* kupim　domat　ot　neja.
　　DA buy:2pl tomato:Pl　from　she:Acc
　　'Let's buy some tomatoes from her.' (Ibid.: 106)
　d. Hajde *da* izpiem　po edna rakija!
　　DM　DA drink:1pl by one　rakia
　　'Come on, let's each drink rakia!' (Alexander (2000: 82))
　e. Hajde *da* vlezem!
　　DM　DA enter:1pl
　　'Come on, let's enter!' (Ibid.)
　f. Hajde *da* zakusim　zaedno.
　　DM DA have-breakfast:1pl together
　　'Come on, let's have breakfast together.' (山崎 (1985: 88))
　g. Heka *da* platim　i　stavame.
　　DM　DA pay:1pl and　stand-up:1pl
　　'Let's pay and get out of here.' (Ibid.)

この用法では、(18d-f) のように хайде (hajde)「さあ」や (18g) の иека (neka)「〜しよう」といった談話小辞 (discourse particle) が付加されることもある。[11] 興味深いことに、(19) のように疑問標識 ли (li) をともない疑問文になることもある。この場合、独立 da 構文はおよそ英語の 'Shall we …?' または 'Let's …, shall we?' の発話形式に相当する。

(19) a. *Da* otidem li na pazara?
DA go:1pl Q to market:Def
'Shall we go to the market?'
(Holman and Kovatcheva (1993: 114))

b. *Da* kupim li papeša?
DA buy:1pl Q melon:Def
'Let's buy the melon, shall we?' (Ibid.)

c. *Da* vzemem li butilka vino?
DA take:1pl Q bottle wine
'Let's take a bottle of wine, shall we?'
(Holman and Kovatcheva (1993: 122))

次の用法では、да 節の動詞は 2 人称であり、その構造は 'That you give me more of those' のようになる。これはある種の命令文である。文頭に英語の please に相当する моля (molja [lit. 'I beg']) を添えるとより丁寧な命令文となる。以後、この用法を「命令用法」(imperative use) と呼ぶ。

(20) a. R *da* mi dadeš ošte, ...
DM DA me:Dat give:2sg more.'
'Hey, give me more of those.'
(J. Jovkov, *Šibil*; 松永 (1986: 32))

b. Slušaj ... *da* se oženiš, ...
listen:Imp ... DA Refl marry:2sg.
'Listen ... you should get married.' (Ibid.; 松永 (1986: 34))

c. ... *da* me pomniš, ...
DA me:Acc remember:2sg
'Remember me, ...' (Ibid.; 松永 (1986: 36))

d. *Da* si varviš ošte sega!
DA Refl leave:2sg right now
'Go away now.' (松永 (1991: 125))

e. Molja *da* sahranjavate bagaža mi.
please DA keep:2pl baggage:Def my
'Please keep my baggage.'

c. Molja *da* osvobodite stajata.
please DA make-free:2pl room:Def

'Please check out.'

否定命令文では、文頭に否定命令を現す動詞 недей (те) (nedej (te))[12]が置かれる。おそらくこの場合は真の意味で独立 da 構文とはいえないので、以後の議論では (20) のタイプの肯定命令のみを問題とする。[13]

(21) a. Nedej *da* otivaš!
don't:2sg DA go:2sg
'Don't go!' (Holman and Kovatcheva (1993: 181))

b. Nedejte *da* čakate!
don't:2pl DA wait:2pl
'Don't wait, please!' (ibid.)

いっぽうブルガリア語には да 節を用いた (20)-(21) の構文にくわえて、通常の命令法屈折による命令文も存在する。

(22) a. *Dajte* mi, molja, edin kilogram domati.
give:Imp:2pl me:Dat please one kilogram tomatoes.
'Please give me one kilogram of tomatoes.'
(Holman and Kovatcheva (1993: 106))

b. Molja, *otvorete* vratata.
please open:Imp:2pl door:Def
'Open the door, please.' (山崎 (1985: 87))

c. Ne *zatvarjaj* prozoretsa.
Neg close:Imp:2sg window:Def
'Don't close the window.' (Ibid.)

残念ながら、現時点では独立 da 構文を用いた命令文 (20)-(21) と命令法による命令文 (22) の意味・用法の違いは明らかではない。[14]

次の用法では、да 節の動詞は様々な人称をとる。まず да 節の動詞が 1 人称の場合を見てみよう ('That I introduce my wife to you')。次の (23) は英語の 'Let me ...' または 'Shall I ...?' の発話形式に相当し、何らかの「申し出」を行うさいに発話される。

(23) a. *Da* vi dam li?
DA you:2pl Dat give:1sg Q
'Shall I give you some?' (Holman and Kovatcheva (1993: 106))

b. *Da* Vi predstavja žena si
DA you:Dat:2pl Dat introduce:1sg wife my
'Let me introduce my wife to you.' (= (1))

c. Elate *da* vi pokaža njakolko kufara i čanti.
come:Imp:2pl. DA you:Dat:2pl show:1sg several suitcases and bags
'Come and let me show you several suitcases and bags.'

(23a)は疑問標識 ли (li)が示すとおり疑問文であり、ちょうど英語の 'Shall I ...?' の発話形式に相当する。いっぽう(23b)と(23c)も英語の'Let me ...' に相当し、「申し出」を行うさいに用いられる。これと意味的に関連が深い用法として、しばしば「3人称命令文」(third-person imperative)として扱われる(24)のタイプの文がある。(24)の да 節の動詞は3人称である('That he/she/they read(s)')。

(24) a. *Da* èete!
DA read:3sg.
'Let him/her read.' (Papantchev (1994: 41))

b. Neka *da* stane goljam oganjat!
DM DA grow:3sg big fire:Def
'Let the fire grow big.' (松永 (1991: 125))

(24)は聞き手を介して第3者に行為を遂行させるという、いわば「間接的指示」(indirect direction)というべきものである。このため、(24)の独立 da 構文を英訳するためには必ず let のような使役動詞が必要となる。これは(24)が第3者による行為の遂行を望む話し手の意図を含意することの反映である。また(23)の用法もこの用法の延長上にあるものと思われる。ただし後者では、話し手が行為の遂行を望む対象が当の話し手本人であるため、「命令」や「指示」ではなく自分の行為を望む、つまり許可を求める行為と解釈される。これは英語の'Let me ...'が許可を求める表現として用いられるのとまったく同じである。(23a)のような疑問文は、英語の'Will you let me ...?' のような丁寧な言い回しに対応するのではないだろうか(cf. Will you let me take it for a test drive?)。以上の点から、(23)-(24)のタイプをひとまとめにして「指示用法」(jussive use)と呼ぶ。

以上の独立 da 構文の3つの用法は、発話行為という観点からは明確に区別されるべきだが、根底にある意味構造は基本的に同じであると考えられる。じっさいこれら3つの用法の違いは、たんに да 節の動詞がとる人称の違いとコンテクストの相互作用から生ずる解釈の違いにすぎない。勧奨用法では、да 節の動詞は1pl、命令用法では2sg/pl、指示用法では3sg/pl もしくは1sg/pl と、それぞれの用法に異なった人称と数の組み合わせが用いられる。この状況を表としてまとめたのが表1である。

用法	勧奨用法	命令用法	指示用法
人称・数	2pl	2sg/pl	1/3sg/pl

表1

指示用法ではもっとも広い範囲の人称・数の分布が見られる。これは指示用法が独立 da 構文のもっとも基本的な用法であることを示している。つまり、勧奨用法と命令用法は、指示用法の意味と特定の人称・数の意味が相互作用することによって生じた派生的な用法だと考えられるのである。先ほどふれたが、指示用法の根底には話し手が да 節の叙述する行為の実現を望む、つまり 'I want X to happen' とでも記述できる意味があると考えられる。しかし、用法を問わず、独立 da 構文の да 節は常に話し手が実現を望む命題を表すので、この意味構造はすべての用法にあてはまる。つまり、勧奨用法では да 節の主語は1pl なので、'I want [$_X$ we do something] to happen'、命令用法では да 節の主語は2sg/pl なので、'I want [$_X$ you do something] to happen' といった記述が可能である。これらの意味構造がそれぞれ「勧奨」や「命令」につながることは想像に難くない。

ここで参考までに、独立 da 構文の勧奨用法と類似した談話機能をもつ英語の let's の発達について考えてみよう。勧奨法的に用いられる英語の let's が 'Let us ...' の形式の命令文であったことは自明である。'Let us ...' から let's への発達については Hopper and Traugott (2003[1993]:10-13) などに詳しい。それによると、現代英語の let's は文法化 (grammaticalization) の結果、使役構文から 'I suggest that I and you ...'「私とあなたが～することを勧める」という意味の談話小辞 (discourse particle) へと発達した。[15] さて、'Let us ...' の発話形式はほんらい聞き手に許可を求める 2 人称命令文であり、表面化されない意味上の主語は you である。この命令文では聞き手は us の指示対象には含まれない。後者の用法は現代英語にも残っている。

(25) a. Please let us see him. We know he's here.
　　 b. Let us know when you are back.

この用法では、let は allow とほぼ同義なので、'Let us ...' の解釈はおよそ '(I beg) *you* to allow us ...' (意味上の主語は you) となる。つまり、'Let us ...' から談話小辞 let's への発達にさいし、意味上の主語が you から I へと変化し、[16] us の指示範囲も聞き手を含むように拡張されたのである。Hopper and Traugott (2003 [1993]) はこれを主観化 (subjectification) と呼

ばれる意味変化であると主張する。つまり、'Let us ...' ほんらいの2人称志向の意味 '(I beg) *you* to allow us ...' が主観化の結果、話し手側に引きつけられ、'I suggest that I and you ...' という話し手を意味上の主語とする意味が生じたというのである。Traugott らによると、上記の意味変化は、'Let us ...' が表す「許可」の働きが、特定のコンテクストにおいて行為の「提案」または「推奨」の働きへと拡張使用されたことに端を発する。このコンステクスト依存の用法が社会に普及し、そのようなコンテクストでくり返し使用されることにより、'Let us ...' の意味はしだいに特定性を失い(一般化)、同時に状況に対する話し手の態度へと移行し、ついには 'I suggest that I and you ...' という let's の意味を生み出したのである。[17]

さて、かりに独立 da 構文の基本的意味が概略 'I want X to happen' であり、それに対応して2人称の主語をもつ да 節が I want [$_X$ we do something] to happen' を表すとすれば、'I suggest that I and you ...' という勧奨文の意味が生ずる理由は let's の場合よりも説明が容易である。「提案」という行為には話し手が行為の実現を望むという誠実性条件(sincerity condition)が課せられる。[18] つまり、'I want us to ...' は 'I suggest that we ...' の前提となるので、前者はしばしば後者を含意する。ここで(26)の例を考えてみよう。

(26) a. I want us to get along.
b. I never want us to part.
c. I just want us all to stay informed.

これらの発話は、たんに願望を述べているばかりか、聞き手に対して「提案」を行っているものとも理解できる。例えば、(26a)は 'I suggest that I and you get along'、(26b)は 'I suggest that I and you not part'、そして(26c)は I suggest that I and you stay informed' と解釈できる。したがって、(26)のタイプの文はたいてい let's を用いてパラフレーズできる(cf. Let's get along, Let's not part, Let's stay informed, ...)。そうだとすれば、1pl の動詞をもつ(18)の да 節も(26)に類似した含意を持っていたと推測することが可能である。そしてこの含意が慣習化し、特定のコンテクストでくり返し使用され、語用論的に強化されれば、1pl の主語をもつ да 節が勧奨文として特殊化したとしてもまったく不思議はない。

次に2sg/pl の主語をもつ да 節が命令文の働きを担う理由だが、これはさらに説明が容易である。独立 da 構文の基本的意味が'I want X to happen' だとすると、2sg/pl の主語をもつ да 節は、'I want [$_X$ you do something]

to happen' を意味し、結果的に英語の 'I want you to ...' に近い解釈になる。英語の 'I want you to ...' が間接的な「要求」の表現として使われることはいうまでもない。

(27) a. I want you to marry me. (⇒ Please marry me.)
b. I want you to meet a good friend of mine.
(⇒ Please meet a good friend of mine.)
c. I want you to come as my special guest.
(⇒ Please come as my special guest.)

したがって、2sg/pl の主語をもつ да 節が命令文の働きをもつ理由は(27)のタイプの発話が「要求」を表しうるのと基本的に同じである。(27)のタイプの発話が「要求」を含意しうるのは、行為の実現を望むことが「要求」という行為のもっとも基本的な適切性条件のひとつだからである(cf. Gordon and Lakoff (1975))。同様に、独立 da 構文が話し手の願望と理解され、かつ да 節の動詞が 2 人称であれば、(27)のタイプの発話と同様の含意が生じたとしてもなんら不思議はない。

さて、以上の 3 つの用法にくわえて、独立 da 構文にはもうひとつ主要な用法がある。ある種の祈願文での用法である。この用法では、とくに解釈と人称・数の相関関係は認められない。この点が上記の用法と異なる点である。(28)の各例の動詞の人称に注目してほしい。

(28) a. Da *ste* živi i zdravi!
DA be:2pl alive:pl and healthy:pl
'May you be well and healthy!' (Alexander (2000: 225))
b. Da *živee* demonkratsijata!
DA live:3sg democracy:Def
'Long live democracy!' (Ibid.: 273)
c. Da *sme* živi i zdravi.
DA be:1pl alive:pl and healthy:pl
'May we well and healthy!'

この用法の独立 da 構文は英語の may を用いた祈願文と同様の働きを持っており、да 節は話し手が実現を願う状況と理解される。この用法を「願望用法」(optative use)と呼ぶ。

さて、独立 da 構文が 'I want X to happen' を表すとすれば、(28a)は概略 'I want [$_x$ you are well and healthy] to happen' となり、この意味構造が「祈願」という行為にふさわしいことが容易に理解できる。ちなみに

英語の let を用いた命令文も祈願文に類似した解釈を帯びることがある。

(29) a. Let their love be ever so strong. (SRD)
b. Please God, let him telephone me. (CCD)
c. Let her come home safely. (OALD[6])
d. Don't let him be the one who died, she prayed. (LDCE[4])

このタイプの発話は文形式からすると 3 人称命令文だが、聞き手を想定していない点が通常の命令文と異なる。ただし、(29b)の文に明示されているように、この「祈願文」の(少なくとも暗に)想定される聞き手は神あるいは超自然的存在である。つまり(29)はどれも神に向けられた 3 人称命令文(cf. Let it be known)だと考えることができる。しかもコンテクストによっては「祈願文」なのか単なる 3 人称命令文なのか区別がつきにくい例も多い(cf. (29c))。

同じことは願望用法の独立 da 構文にも当てはまる。(28)には解釈的に曖昧性のないものばかりをあげたが、もちろん曖昧な例を作ることは可能である。(30)がその例である。

(30) *Da* e zdrav!
DA be:3sg healthy
'May he be healthy' or 'Let him be healthy.'

以上の点から、独立 da 構文の願望用法は発話行為という観点からすると指示用法とまったく異なるが、意味的にはきわめて近い関係にあるといえる。つまり、願望用法の起源は神に向けられた指示文ではないかと思われる。したがって、通時的に考えると、願望用法を指示用法の 1 変種と考えてもよいだろう。これが正しければ、表 1 を特に修正せずに独立 da 構文の用法と人称・数の対応をとらえることが可能である。

さて、この節を結ぶにあたり、この節で明らかになった独立 da 構文の用法と人称・数の対応、そしてそれぞれの用法に典型的な解釈を次の表 2 にまとめた。

用法	動詞の人称・数	解釈
勧奨用法	1pl	I want [$_x$ we do something] to happen
命令用法	2sg/pl	I want [$_x$ you do something] to happen
指示用法	1sg/3sg/pl	I want [$_x$ he do something] to happen

表 2

この表からわかるように、独立 da 構文の意味構造の基本形は 'I want X to happen' であり、この意味構造の X に да 節の命題が当てはめられ、具体的な解釈が生ずる。それぞれの用法に典型的な解釈はこの基本的意味構造と да 節の主語の人称・数から生ずる解釈の組み合わせから計算される。さらに独立 da 構文がもつ発語内の力はそれぞれの意味構造が具体的なコンテクストに適用されて生ずる。例えば、'I want [$_X$ we do something] to happen' ⇒「勧奨」、'I want [$_X$ you do something] to happen' ⇒「命令」、'I want [$_X$ I/we do something] to happen' ⇒「申し出」、I want [$_X$ he/she/it/they do something] to happen' ⇒「指示」/「祈願」といった具合である。[19]

さて、次なる問題はなぜ独立 da 構文が 'I want X to happen' という意味構造を表しうるかという点である。3.1節で論じたように、独立 da 構文はもともと補文であった да 節が、主節の脱落により独立節へと発達したものと考えられる。補文としての да 節は、主語節・目的語節・副詞節など様々な統語的環境で用いられ、それだけに命題を未実現の事柄あるいは純粋な観念として提示する以上の働きはもたず、けっして 'I want X to happen' のような複雑な概念は表さない。かりに да 節が一般に 'I want X to happen' を表すとすると、(31)のようなコンテクストでは解釈の矛盾が生じてしまうだろう。

(31) Radvam se da se zapoznaja c Vas.
be-glad Refl DA Refl acquaint:1sg with you:pl
'I'm glad to know you.' (Papantchev (1994:41))

この文の да 節は聞き手との出会いを事実ではなく観念として提示しているだけで、出会いに対する願望の念は含意しない。[20] また、2.2節で論じたように、一般に補文は発語内の力をもたない。したがって、独立 da 構文がなぜ 'I want X to happen' といった複雑な概念を表すにいたったか、そしてその結果、発語内の力を持つに至ったかという点は、独立 da 構文の本質を考えるうえでとても重要な問題なのである。次節では、この点を念頭において独立 da 構文成立の過程を通時的な観点から考察したい。

4. 意味憑依と独立 da 構文の誕生

この節では、前節の終わりに述べた問題——なぜ独立 da 構文は 'I want X to happen' を表すに至ったか——という点に留意しながら、独立 da 構文の発達過程について論じる。3.1節で論じたように、独立 da 構文は主節の

脱落により да 補文が独立節へと格上げされたものと考えられる。このタイプの統語発達はしばしば脱従属化と呼ばれる。しかし、問題は独立 da 構文を生み出した主節の省略は復元可能性(recoverability)に従わなかった可能性が高いということである。なぜこのようなことが可能であったのか。これらの問題は複雑に絡みあっており、これらを統一的かつ原理的に説明するためには、この発達に対して筆者が便宜的に「意味憑依」(meaning possession)と呼ぶ意味変化のパタンを想定する必要がある。本論に入る前に、意味憑依について具体例を用いて概観しておこう。

4. 1. 意味憑依

筆者が意味憑依と呼ぶ現象は、言語表現が起源語(source)の意味から予測できない逸脱した意味[21]を発達させるいわゆる不規則意味変化(irregular semantic change)の1例であり、省略との関連で顕在化することが多い(cf. 前田 (2005))。ところで、不規則的意味変化にも様々なタイプがある。よく見られる不規則的意味変化のパタンでは、言語外の要因によって変化が生ずるため、変化が起こった社会的背景を知らなければまったく説明がつかないということも多い(cf. Anttila (1972)、McMahon (1994: 175))。例えば、口語英語の holy cow は驚きを表明するための慣用句で、およそ wow などの間投詞(interjection)に相当する意味をもつ。だが、この意味はその文字どおりの意味である 'sacred mature cattle' からは容易に予想できない。

なぜ 'sacred mature cattle' は間投詞の意味を獲得したのだろうか。holy cow は holy God という表現から、God という語の使用を忌避するために作られた婉曲表現(euphemism)である。[22] つまり、God のかわりに cow を用いた特別の意味的動機はない。しかもDalzell and Victor(2006) によると、この表現が一般化した最大の要因は、Harry Caray と Pill Rizzuto というラジオの人気アナウンサーがこの表現を好んで用いたというまったくの偶然的要因のためだという。したがって、'sacred mature cattle' から間投詞の意味への変化には認知的もしくは言語内的(language-internal)な必然性はないといってよい。このタイプの意味変化はあるいは語源学的には重要な研究課題となるかもしれないが、言語学的な観点から論じられることはあまりない。[23]

いっぽう筆者が意味憑依と呼ぶ変化のパタンも、不規則的意味変化である点にかわりはないが、ある程度の言語学的動機があるという点が先ほどの holy 'cow' > 'wow'のタイプと異なる。つまり、意味憑依は不規則的意味

変化でありながらしかも完全に不規則でもないということである。では不規則的でありかつ言語学的動機をもつのはなぜか。これは意味憑依が要素間の語用論的関係を前提として起る意味変化だからである。[24] これは筆者が「置換型憑依」(permutational possession)と呼ぶタイプの意味憑依である。[25] 論点を明確にするために、ひとつ具体例を示しておこう。

意味変化の文献において省略と連動して起こった意味変化の代表例として幾度となく引用されてきたものに、pas の否定辞(negation)への発達があげられる(cf. Stern (1931)、Ullmann (1962)など)。フランス語の否定辞はもともとラテン語の non 'not' に由来する ne であり、'ne ... pas' という複合否定(complex negation)が生じたのは後代の発達による。現代口語フランス語では、(32)のように pas だけを用いて否定を表すことが多い(cf. 目黒 (2000: 41)、Ramat (1993: 2771)、Hopper and Traugott (2003 [1993]: 66, 123)、Eckardt (2006: 133)など)。

(32) a. Je sais *pas*.
I know:1sg Neg
'I don't know.'
b. C'est *pas* vrai.
it+be:3sg Neg true
'It isn't true/No way.' (目黒 (2000: 41))

この傾向はフランス語では本来の否定辞 ne が 'ne ... pas' の複合否定の段階をへて今まさに pas に置き換えられようとしていることを如実に示している。ここで注目したいのは pas の辿った意味変化の過程である。pas はもともと否定語ではなかった。それどころかpasは否定とはまったく無縁な'step'という意味をもっていた。[26] この 'step' という意味は、faire un *pas* en avant 'to make a step forward' のように、現代フランス語でもなお pas のひとつの用法として残っている。結局、pas の意味発達は 'step' の意味から始まり、最終的には否定の意味(=[NEG])へと逢着したのである。この'step'の意味と[NEG]の間には有意義な概念的関連を想定できないので、この変化を意味論的に説明することはできない。むしろ語用論的な説明が必要である。

さて、pas が[NEG]を表すようになった主要な要因が[NEG]を表す ne とのコロケーションにあることは誰の目にも明らかである。例えば、Stern (1931: 250)もこの発達について次のように述べている。

In a binary combination consisting of head-word and qualifier it

sometimes happens that the whole fuses into a practically unitary appellation, out of which one link may be allowed to drop without detrimental effects, because of the close association to the meaning. … The outstanding instances of this type are the French negations: the negative particle *ne* is dropped in connection with *pas* … The omission could not have taken place if the whole expression *ne-pas*, … had not first fused into a unit, and been apprehended by linguistic feeling as signifying 'not.'

また、Ullmann (1962) も次のように述べている。

ある語結合が習慣的に行われると、そこに含まれている語の意味が永続的に変化してしまうということがある。この過程は、…ある語が他のある語と多くのコンテクストで一緒に用いられるために、一方の意味が他方に転移させられるのである。この傾向に関する最も顕著な例は多分フランス語における否定の歴史であろう。本来は肯定的な意味をもっていた多くの語が、否定辞の ne と結びついてよく用いられるがために否定の意味をもつようになったのである。

(池上嘉彦訳、p. 226)

じっさい ne > pas の否定辞の交替を説明するさいに、ne の省略により残された pas が単独の否定辞になったと述べるのはじつに簡単だが、意味変化の観点からすると問題はそれほど単純ではない。なぜなら上述のように、言語表現の省略には復元可能性の制約が課されるからであった。Stern (1931) からの引用にも明確に述べられているように、ne の省略が可能であったのは、ne ばかりか pas も否定の意味を表し、ne が脱落したあとも否定の意味が解釈可能であったからである。つまり、pas は ne の省略が起こる以前から単独で否定の意味を表しえたと考えねばならない。

では、'step' の意味の pas が否定の意味を獲得するにいたる過程を概観してみよう。まず Hopper and Traugott (2003 [1993]: 65-66) によると、否定辞としての pas の発達の過程は表 3 のとおりであった(ただし彼らの分析は Hock (1991) の分析に準拠している)。まず pas の語源から明らかなように、この発達は移動を表す文で始まったものと推測される。

第1段階	否定は動詞の前にneだけを置くことによってなされた。 Il ne va. 'He doesn't go.'
第2段階	移動の動詞をふくむ文で、随意的にneが擬似目的語（pseudo-object）のpas「一歩」によって強化されることがあった。 Il ne va *pas*. 'He doesn't go a step.'
第3段階	[*ne* Verb-of-motion *pas*]という構造でpasが否定辞として再分析(reanalysis)された。
第4段階	類推(analogy)をつうじて移動に無関係な他の動詞にまで否定辞としてのpasの使用が拡張された。この段階で構造は[*ne* V *pas*]となった。 Il ne sait *pas*. 'He doesn't know.'
第5段階	否定辞としてのpasがあらゆる環境で義務的に使われる汎用否定語として再分析された。
第6段階	口語のスタイルで、本来の否定辞neがpasの代わりに使われるようになった。まずneが随意的(optional)になり、ついに省略され、消失した。 Il sait *pas*. 'He doesn't know.'

表3

この表の[第1段階]から[第2段階]かけては、pasがneとともに使われた場合でも、両者の間に特に顕著な構造的・意味的関係があったとは考えられない。なぜならneが否定辞であったいっぽうでpasはある種の目的語にすぎなかったからである。つまり、両者は構造的にも意味的にも不連続の要素だったと考えられる。だが、neとpasのコロケーションは否定強調の効果をもっていた。これはむろんレトリカルな効果をねらった意図的な談話方策(discourse strategy)であっただろう(cf. Eckardt (2006: 161))。[27] したがって、両者は構造的・意味的には無関係だとしても、発話解釈というレベルで眺めると、強調の関係という顕著な語用論的な関連をもっていたのである。

さて、表3の[第2段階]から[第3段階]への移行期には、まず'ne ... pas'のコロケーションが移動を表す文で慣習化され、neとpasの間の語用論的関係が強化された。この両者の関係は最終的に擬似イディオム(quasi-idiom)と呼びうる単位を生み出すに至った。これはStern(1931)が'unitary apellation'呼ぶものに相当する。ne-pasの擬似イディオム化の結果、neとpasはついに複合否定表現と解釈されるようになった。この過程のどこかでpasが否定の意味を獲得したことは間違いない(cf. Eckardt (2006 : 146))。

さて問題は本来の‘step’の意味から否定の意味への変化は規則的・連続的な意味変化のパタンでは説明できないということである。[28] つまり、これは不規則的意味変化なのである。pas が否定の意味を獲得した過程は次のふたつの連動する意味変化の過程として記述できる。

まずこの過程で重要な働きをしたのは意味の漂白化(bleaching)である。意味の漂白化は、文法化(grammaticalization)の過程などでよく観察される意味変化のパタンで、語彙項目の意味がしだいに特定性を失っていく過程である。つまり、擬似イディオム化の進行につれて、pas は漂白化により‘step’の意味を失っていったものと考えられる。この点は発達の[第4段階]以降において、‘ne … pas’のコロケーションが移動を表さない大多数の動詞にも拡張使用されたことからも明らかだろう。かりに pas が擬似イディオム化の後も‘step’の意味を保持していたとすると、意味の衝突により savoir ‘know’や chanter ‘sing’のような動詞とは共起できなかったはずである。だが、漂白化だけでは pas が単独で否定辞として働きうる理由を説明できない。つまり、pas の意味変化を説明するためには、pas が‘step’の意味の漂白化に続いて否定の意味([NEG])を獲得する過程が必要なのである。筆者のいう意味憑依がそれにあたる。このタイプの意味憑依(置換型憑依)では、要素 A にその外部に位置する要素 B に由来する概念 B’が転移(metastasis)し、A と B’の間に新たな記号関係(A-B’)が成立する。擬似イディオム ne-pas の場合、図1のように、ne の否定の意味が pas に転移されたと考えるのである。

起源語	標的語			
NE	PAS	⇒	NE----------PAS	
[+NEG]	[-NEG]		[+NEG]	[+NEG]

図1

ne の意味が pas に転移された結果、両者はともに[NEG]を表すようになり、‘ne … pas’は確立された複合否定の表現としてフランス語の文法に組み込まれた。結局、pas の否定辞化にともなう意味発達は次のように記述できる。

(33) ‘step’ —→ ‘Ø’ —→ ‘NEG’
漂白化　　意味憑依

以上の発達が表1の[第4段階]から[第5段階]にあたる。

ちなみに、Eckardt (2006: 140)によると、9世紀後半から10世紀にかけての最古のフランス語テクストでも、pasはすでに移動と無関係な概念を表す様々な動詞とともに用いられていた。したがって、pasの発達の[第4段階]はそれよりも以前の時期に遡らねばならない。つまり、想定される[第1段階]から[第3段階]までの発達はフランス語テクストでは確認できないが、Ramat (1993: 2771)によると俗ラテン語(Vulgar Latin)の段階でnon vado passum 'I don't proceed *a step*' というコロケーションが見られたというから、ひょっとするとこれらの段階の発達はフランス語の確立以前にすでに完了していたのかもしれない。また、[第5段階]の完了は16世紀頃と思われる。Wartburg (1934)によると、13世紀のフランス語では、ne単独の否定と 'ne ... pas' の複合否定の割合はざっと9対1ほどだが、15世紀末になるとその比率は逆転する。したがって、pasの使用が義務化するのはこれに続く時代であろう。

さて、[第6段階]はneの省略の慣習化により完了する。この省略は擬似イディオム化の結果生じた否定語の重複から生ずる余剰性を解消するための経済性志向の方策(economy-oriented strategy)だと考えられる。Marchello-Nizia (1992 [1979]: 244)によると、ある種の疑問文でpasがneをともなわずに単独で使われるようになるのは、13世紀以降のことであるが、頻度が増すのは16世紀以降である。その後、neの省略は次第に他の環境に一般化したが、その傾向は現在にいたるまで続いている。では次に、pasではなくneが省略された理由について考えてみたい。まず言語変化の傾向として、同じ談話機能をもつ新旧2つの表現が同じ環境で併用される場合、先に廃用になるのは古い表現であることが多い(cf. Hopper and Traugott (2003 [1993]: 122-124))。この現象をマクロの視点から眺めると、旧表現が新表現によって置きかえられたように見える。Meillet (1958)がこの現象を「刷新(renouvellment/renewal)」と呼んだのはこのためである。[28] 機能的な観点からすると、pasではなくneが廃用となる理由は明らかである。neは統語的に接語(clitic)であり強調(stress)がおけないなど使用の制約が多く、pasにくらべて表現力に乏しい。このため、話者が最終的により表現力豊かなpasを選んだのはまったく談話の目的にかなった方針であったといえる(cf. Stern (1931: 264))。

興味深いことに、現代フランス語では、pasをめぐってさらなる意味憑依が起こりつつある。上述のように、口語においてpasは単独で用いられるこ

とが多いが、単独の pas はしばしば du tout ‘at all’ (lit. ‘of the all’)を用いて強調される(pas … *du tout* ‘not … at all’)。このコロケーションはすでに慣習化されて久しく、以前の ‘ne … pas’ のように擬似イディオム (pas-du tout) の段階に達しているものと考えられる。この結果、(34) のように、pas それ自体も省略され、du tout が単独で[NEG]を表すことがある。

(34) Croyez-tous que je vous blâme? — *Du tous.*
Believe:2sg+you Comp I you blame:1sg of all
‘Do you believe that I blame you? — No, I don’t.’
(Ramat (1993: 2771))

pas と同様に、du tout ももともと否定の意味をもたないので、(34)の例は pas の[NEG]が意味憑依をつうじて du tout に転移されたものとみなさねばならない。結局、pas をめぐる意味変化をマクロに俯瞰すると、ne → pas → du tous というかたちで[NEG]がバトンタッチされたことになる。

否定辞としての pas/du tous の発達にかぎらず、否定辞の省略をめぐる意味変化では、意味憑依によって説明できるものがきわめて多い。例えば、英語の‘only’ の意味の but(e.g. We have here *but* five loafs、We can *but* try —OALD)も、古英語の ne + butan ‘NEG + out of’ の否定辞 ne が省略されて生じたものである(cf. Stern (1931: 264)、寺澤 (1997: 179)など)。この but の意味は ne の[NEG]が but に転移し、but 単独で ‘NEG-out of’ (> ‘NEG-except’ > ‘only’)を表すようになったことに由来する。[30] ここでもまず擬似イディオム ne-butan が作られ、ne の[NEG]が butan に転移した後に ne の省略が可能となったものと考えられる。この例からもわかるように、意味憑依はきわめて一般的な意味変化のパタンなのである。

4. 2. 独立 da 構文の発達

さて、ここで独立 da 構文に話を戻そう。もともと命題を観念または非事実として提示する働きしかもたなかった да 節が ‘I want X to happen’ のような複雑な概念を獲得した理由も、やはり通常の意味変化のパタンでは説明できない。したがって、この場合も、‘I want X to happen’ が да 節の外部から転移されたという可能性を考えてみる価値は十分にある。独立 da 構文には大別して 4 つの用法があり、それらは表 2 に示した 3 つの解釈に由来するものと考えられる。これらの意味構造をみてすぐに気がつくのは、独立 da 構文は да 節が単独で「欠けた主節」の意味まで包摂したような解釈をもつということである。つまり、独立 da 構文は単独で主節 искам (iskam)

'I want'をもつ発話に近い解釈をもつのである。例えば、(35)の各文の解釈はそれぞれ独立 da 構文の 3 つの意味構造に対応している(да 節の動詞の人称・数に注目)。

(35) a. Iskam　da　*objadame*　zaedno.
want:1sg DA have-lunch:2pl together
'I want us to have lunch together > Let's have lunch together.'

b. Iskam　da　*otidete*　v　bankata.
want:1sg DA go:2pl to bank:Def
'I want you to go to the bank. > Please go to the bank.'

c. Iskam　da　*mina.*
want:1sg DA pass-by:1sg
'I want to pass by [lit. I want me to pass by]> Let me pass by.'
(Alexander (2000: 81))

Iskam　da *otide*　v　bankata.
want:1sgDA go:3sg to bank:Def
'I want him to go the bank. > Let him go to the bank.'

したがって、искам のような主節の意味成分が補文標識 да に転移したと考えれば、да 節が単独で 'I want X to happen' を意味するようになった理由が説明できる。だが、pas の発達と独立 da 構文の発達の間にはひとつ大きな違いがある。pas の発達では、ne とのコロケーションだけが問題となった。つまり、ne との 1 対 1 の関係が意味憑依の引き金となったのである。筆者はこれを「1 対 1 転移」(one-to-one metastasis)と呼ぶ。ところが、да 節は日常的に искам をはじめ、трябва (trjabva) 'you must'、[31] пожелавам (poželavam) 'I wish'、мога ли (moga li) 'can I'、предлагам (predlagam) 'I suggest' など 'I want X to happen' という意味構造と関連した解釈をもつ様々な主節とともに用いられる。[32] したがって、この場合、必ずしも искам と да の間の 1 対 1 の関係によって意味憑依が起こったとはかぎらない。このように意味憑依が多対 1 のコロケーションに由来したと思われるケースを、「多対 1 転移」(many-to-one metastasis)と呼ぶ。

多対 1 転移では、pas に起こったような 1 対 1 転移の場合と異なり、転移の引き金となる擬似イディオム化もかなり抽象的なパタンとならざるをえない。しかも искам のような主節と補文標識 да の間には ne と pas に見られた強調の関係も容易には想定できない。さらに独立 da 構文の意味は pas のように具体的ではないので、искам や трябва のような個々の動詞の意味が

そのまま転移されたとも考えにくいのである。

まず、искам のような主節と補文標識 да の擬似イディオム化を引き起こした語用論的関係とはどのようなものだろうか。искам と да の間には節の境界があり、構造的には不連続である。例えば、(36a)の文は(36b)のような構造をもつと考えられる。

(36) a. Iskam da namerja svobodno mjasto.
want:1sg DA find:1sg vacant seat
'I want to find a vacant seat.' (Alexander (2000: 81))
b. *Iskam* [*da* namerja ...]

しかも искам と да の間には修飾関係のような顕著な意味関係もない。では、何が両者を関係づけたのか。筆者はこれを Morgan (1978)のいう「使用の規約」(convention of usage)だと考える。Morgan によると、使用の規約とは、特定の発話行為のために使用しているうちに慣習化により固定化した発話パタンのことをいう。例えば、Can you pass the salt? という間接発話行為の表現は、イディオムとはいえないが、'Can you ...?' という発話パタンは半ば固定化されているように思える。また解釈的にも、Can you pass the salt? はとくに文字どおりの意味 'Do you have the ability to pass the salt?' を介せずに意図された解釈が半自動的にえられる。つまり、'Can you ...?' という発話形式は擬似イディオムとしての性質をもっている。この点は kick the bucket 'die' のような真性のイディオムとの違いに目を向ければわかりやすいだろう。後者では、コロケーションはほぼ完全に固定化されており、そのため bucket を basin のような表現と交換するとイディオムとしての解釈は消えてしまう(kick the basin は文字どおりの意味しかもたない)。いっぽう 'Can you ...?' は Can you mail this letter for me? や Can you set the table? のようにパタンにしたがっていくらでも異なった発話を作ることができる。つまり、kick the bucket のようなイディオムは通常の語彙項目(lexical item)のようにふるまうのである。Morgan は kick the bucket が apple のような他の語彙項目と同じ規約に従うと考え、それを「言語の規約」(convention of language)と呼んだ。

日常会話の表現を調べてみると、すぐさま発話行為のために特殊化した発話パタンが目に入る。例えば、(37a)の 'It's not like *p*'、(37b)の 'It's a good thing *p*' などである。

(37) a. *It's not like* I care.
b. *It's a good thing* I brought my photo I.D.

とくに(37)の強調部分は不連続の語列というほかないが、すでに固定した発話パタンとなっており、擬似イディオム化がかなり進行している。それが証拠に、解釈を変えず、しかも復元可能性に抵触することもなく語列の一部を省略できる。

(37)' a. Like I care.

b. Good thing I brought my photo I.D.

この事実はおそらく 'It's not like *p*' や 'It's a good thing *p*' でもすでに何らかの意味憑依が起こっていることの証左である。[33] ともあれ、もともと構造的にも意味的にも不連続としか考えられない語列が、特定のコンテクストでくり返し使用されるために擬似イディオムを形成することは日常的な現象なのである。そうだとすれば、かりに искам 'I want' や трябва 'you must' などの主節が使用の規約をつうじて да と擬似イディオムを形成したとしても不思議はないし、またこの考えは直感にも合っている。'искам да *p*' や 'трябва да *p*' でも、'It's not like *p*' や 'It's a good thing *p*' と同じように、擬似イディオム化にともなって意味憑依が起こったとしても不思議はないのである。

だが先ほど述べたように、да に起こった意味憑依は、様々な関連した意味の主節との多対1の関係で起こったと考えられる。このような多対1転移では、да とコロケートされる多数の主節の個々の意味がそのまま転移するのではなく、それらに共通した意味成分が抽出される形で転移が起こるものと考える必要がある(これを便宜上「抽出」(abstraction)と呼ぶ)。さもなければ、それぞれの主節に特有の意味成分が互いに矛盾をきたし、まともな解釈はできなくなる。つまり、例えば 'искам да *p*' と 'трябва да *p*' は話し手が *p* の実現を望む('I want *p* to happen')という抽象的なレベルでは共通しているとしても、それ以外の点では異なる。例えば、両者は話し手が *p* の実現を望む度あいが大きく異なり、その点で解釈的に相容れない。したがって、後者のような個々の動詞に特有な意味成分は転移のさいに捨象されねばならない。結局、да に起こった多対1転移を図示すると図2のようになる。

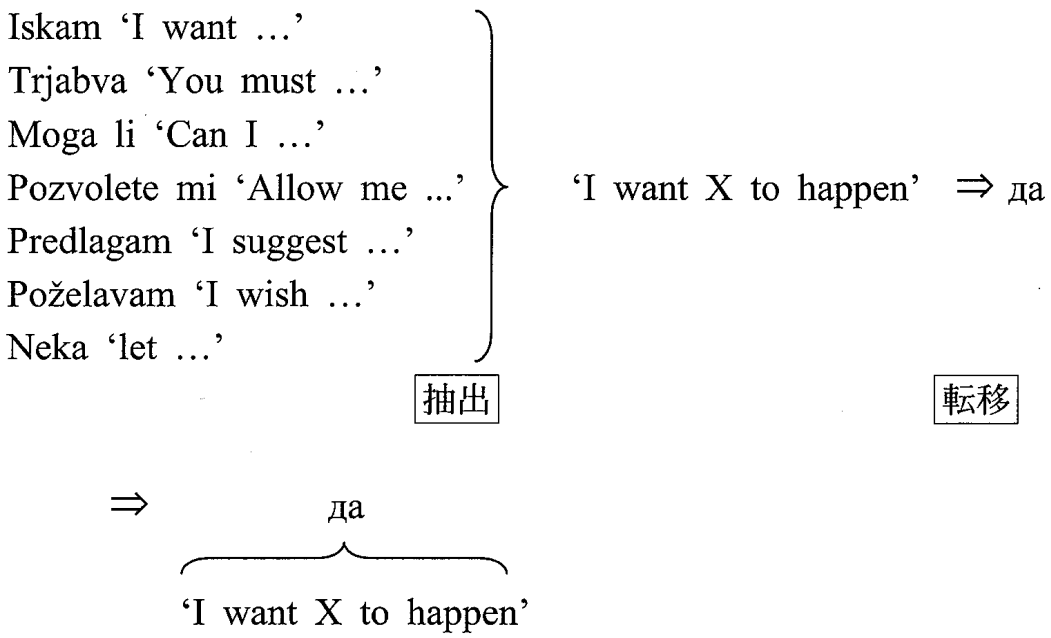

図2

このケースは置換型憑依の1例と考えられるが、補文標識の да はもともと具体的な意味をもたないという点が pas のケースと異なる。つまり、да の場合、漂白化はもともと必要なかったのである。ただ 'I want X to happen' が да に転移されるだけでよかったのである。3.1節で論じたように、独立 da 構文が主節の脱落により誕生したとすれば、それに先行して図2に示したような意味憑依がおこり、да も 'I want X to happen' のような主節の意味を包摂したような解釈をもっていたのでなければならない。さもなければ、主節の省略は復元可能性の制約に抵触してしまう。

そこで主節の省略がどのようになされたか少々考えてみたい。2.2節で論じたように、復元可能性の制約に抵触しないかぎり、複文構造から主節を省略してもとくに解釈上の問題は生じない。そこであげた(11)のような主節の省略では、先行する発話に解釈の鍵が隠されている。

(11) A: Archie, you promised me.
B That's right, Betty. I did ... *To experience the thrill of a slam dunk by my side.*

また、(9)の最初の発話はコンテクストから単なる省略語法だとわかるが、このような省略的発話では、やはり(10)のような先行する発話を受けての発話と理解される。

(9) *Da*　　četa　　li? — Da,　četi.
Comp read:Pres:1sg Q　　Yes　read:Imp:2sg
'To read? — Yeah,read.'　　(山崎 (1985: 88))

(10) Trjabva　da četeš　tazi kniga.
must:3sg DA read:2sg this book
'You must read this book.'

しかし、独立 da 構文を生み出した主節の省略は、おそらくこのような先行する発話を受けての省略ではなかったと思われる。なぜなら、独立 da 構文は2.1節で論じたように、「勧奨」・「命令」・「指示」・「祈願」といった発話行為を行うために用いられるのであり、そのような場合、先行する発話を受けてなされるというのはおよそ考えにくい。したがって、独立 da 構文の生成過程では、当初から(12)のように復元可能性の制約に抵触する形で主節の省略がなされたと考えねばならない。このような省略は、省略に先だちすでに意味憑依が完了していなければ不可能だからである。

以上の説明により、独立 da 構文において да 節が単独で遂行性をもつこと、また独立の GC として発達した理由が説明できる。まず図 2 に示したような意味憑依により да が 'I want X to happen' を表すようになった。この発達の結果、主節が省略されても да 節が単独で遂行文として機能することができるようになった。これは искам+ да 節などが遂行文として働きうる(cf. (35))のとまったく同じ理由である。つまり、独立 da 構文が遂行性の高い GC——換言すれば、発話行為構文(SAC)——へと発達したのは、да が常に 'I want X to happen' を表すからである。さらに、да に 'I want X to happen' の意味が付け加わった分、独立 da 構文は他の да 節よりも解釈が複雑になった。独立 da 構文か他の да 節から意味的に逸脱し、独立した GC としての道を歩むに至ったのはこのためである。以上のように、図 2 に示した意味憑依を仮定することにより、独立 da 構文のような ICC がなぜ発達しえたか、またどのように発達したかを原理だって説明することができる。

5. 結論

本論では、ブルガリア語の独立 da 構文を例にとり、独立補文(ICC)がどのように補文から発達してきたかを考察した。ICC には様々なタイプがあるが、いずれも主節の脱落により生まれたと考えられ、しかももっぱら特定の発話行為のために用いられるという点でも共通している(前田 (2006b))。

これらの特性は遂行的な意味をもった主節の意味が意味憑依をつうじて補文に転移されたと考えるならば説明が可能である。独立 da 構文の誕生を促進した主節の省略は、主節の意味が復元不可能な形でなされたという意味で日常的に見られる通常の省略とは一線を画する。つまり、主節を復元可能性の制約に違反する形で省略するためには、主節がなくても主節の意味がある程度復元可能でなくてはならない。したがって、独立 da 構文が誕生する前提条件として、すでに主節の意味が да に転移されていたと仮定することができる。2.1節で見たように、да が発語内の力の指標として働くことが可能なのは、この要素に 'I want X to happen' のような意味成分が主節から転移したことを示している。

意味憑依という意味変化のパタンは pas の否定辞としての発達に見られるように、もともと意味関係をもたなかったふたつの要素間に何らかの語用論的関係をつうじて擬似イディオムと呼びうる強固な関係が生まれ、それを契機に意味の転移が起こったと考えられる様々な不規則的意味変化の事例を説明するさいに必要なメカニズムである。今後の課題はこの意味の転移を可能にする認知的仕組みを明らかにすることである。

注

1．この呼称は山崎(1985: 88)による。

2．略記記号は以下のとおり。Dat = 与格、Acc = 対格、Def = 冠詞形、Imp = 命令形(imperative)、Past = アオリスト(不定過去)、Q = 疑問標識(question marker)、Refl = 再帰代名詞、Comp = 補文標識(complememtizer)、Neg = 否定辞(negative)、DM = 談話標識(discourse marker)、1、2、3 = 人称、sg = 単数、pl = 複数。

3．ブルガリア語の例文はすべてローマン・アルファベットによって表記する。

4．ただし、通常は独立節として機能しえない補文がなぜ主節として用いられうるかという点だけは、4節で簡単にふれる。

5．発語内の力とは発話によって生ずる「命令」「要求」「約束」などの社会的効力のことである。詳しくは Austin (1975)などを参照。

6．ちなみに Gordon and Lakoff (1975)はこの省略を「do 削除」(*do*-deletion)と呼んでいる。

7．本論でブルガリア語の構文だけをとりあげるのは、筆者がこれらの言語

のうちブルガリア語の母語話者だけにしかアクセスできないという事情による。
8．しかし、英語では動名詞が用いられるいくつかの環境でも да 節が用いられるので、да 節の分布は英語の不定詞よりも若干広いかもしれない。
9．現代ブルガリア語では、かつて不定詞が用いられた環境で広く да 節が用いられるようになった結果、不定詞はほぼ完全に廃用となった。辞書にあげられる形式も1sg の活用形である。
10．前田(2006b)では、古英語(Old English)やラテン語をはじめとするロマンス系の言語に見られる接続法(subjunctive mood)の独立節での用法も従属節の脱従属化により生じたものと主張した。
11．筆者の知るブルガリア語の母語話者によると、(18g)のように иека を添加すると、独立 da 構文はやや丁寧な勧誘と感じられるという。
12．この要素は機能的に談話小辞に近いが、通常の動詞の命令法と同じ活用形を示す点が хайде や иека などと異なる。しかし現時点では、この動詞の語源など詳細は不明である。
13．山崎 (1985: 90)によると、この構文は「иедей(те)+不定法動詞」の構文に由来し、現代でも文語ではアオリスト語幹を直接 иедей(те)に接続する表現法が名残として残っている。口語では иедей(те)の後ろに да 節を接続するが、これは比較的新しい表現法のようである。
14．いくつかの言語において迂言的な命令文のほうが通常の命令法による命令文よりも弱い「命令」を表すという傾向を考えると、命令法(22)による命令のほうが独立 da 構文よりも強い「命令」を表すと予測できる。しかし、筆者がブルガリア語の母語話者に確認したところ、両者の間に目立った強さの違いはないという。
15．なお Quirk et al. (1972: 404)も、Let's go のような文を「1人称命令文」(first-person imperative)と呼び、let's も動詞ではなく「導入小辞」(introductory particle)としている。
16．この変化が起こった結果、'Let's ...' の形式の発話はもはや命令文とは理解されなくなった。
17．また、その過程で us の指示対象が聞き手を含むように拡張されたが、もともと2人称複数代名詞がもつ曖昧性からして、これはとくに顕著な意味変化とはいえないだろう。2人称複数代名には聞き手を含む「包括的」(inclusive)の用法(ia)と、聞き手を含まない「排他的」(exclusive)な用法(ib)があるからである。

(i) a. Shall *we* dance?
b. *We*'ll see you later.

このusの指示対象の拡張は主観化に付随して起こったものと思われる。

18. 誠実性条件は発話行為の適切性条件(felicity condition)のひとつである(cf. Austin (1975)、Searle (1969)など)。Gordon and Lakoff (1975)が主張するように、誠実性条件を述べることは話し手が当該の発話行為を意図していることを含意する。例えば、'I want you to ...'ということは、「要求」('I require you to ...')を含意するが、聞き手の行為を望むことが「要求」という行為の誠実性条件となるからである。

19. 'I want [$_x$ we do something] to happen' という意味構造は「勧奨」と「申し出」というふたつの発語内の力に結び付けられ、潜在的に曖昧である。どちらの解釈が選ばれるかはもっぱらコンテクストに依存して決まる。これは英語の 'Let us ...' が曖昧であるのとまったく同じ事情である。

20. 話し手が命題を事実として提示したいときは、(i)のように да 節ではなく че (če)節が用いられる。

(i) Radvam se, *če* vsičko e nared.
be-glad:1sg Refl Comp everything be:3sg in-order
'I'm glad everything is all right.'
(Holman and Kovatcheva (1993: 94))

この да 節と че 節の違いは、英語の I'm glad が to 不定詞と that 節の両方を選択しうる状況と類似している。Wierzbicka (1988)によると、両者の違いは同じ事象を観念として提示するか事実として提示するかの違いである。基本的に同じ説明がブルガリア語の да 節と че 節の選択にも当てはまると思われる。

21. ここでは「予測できない」は「概念的な関連を想定できない」を意味するものと理解してほしい。

22. これは英語の話者が God を音韻的に転化させて gosh や golly などと発音するのと基本的に同じである。

23. このタイプの不規則的意味変化のメカニズムについては Maeda (2006a)で詳しく論じた。

24. この語用論的関係の本質については4.2節で論ずる。また前田(2005)を参照。

25. 意味憑依にはもうひとつのタイプがあるが、それについては注30を参照。

26. これは現代英語の pace「速度」と同語源で、どちらもラテン語の

passu (m) 'step'に由来する (cf. Ramat (1993: 2771))。
27. Eckardt (2006) は、pas のような否定強調の要素が否定極性項目 (negative polarity item) として機能したと考えている。
28. つまり、これらふたつの概念の間に概念的関連を想定できないということである。
29. だが、共時的に考えると、フランス語の話者はけっして ne を pas と交換したわけではない。両者はしばらく併用されていたが、いつしか ne が使われなくなっただけである。
30. ただし、この変化では pas のように but のもともとの意味 'out of' (= 'except') が消えてしまったわけではない。ne の [NEG] の転移により概念融合 (conceptual blending) が生じ、[NEG] が but の意味と重畳して複合概念 'only' を生み出したのである。筆者はこのタイプの意味憑依を「縮約型憑依」(condensational possession) と呼ぶが、置換型憑依との違いは意味変化を受ける要素の意味が漂白化されていないという点である (前田 (2006b))。
31. трябва は常に3sg の形式で用いられるので、厳密には英語の 'It's necessary to ...' と訳すのが正しい。意味上の主語は да 節の動詞の人称によって示される。本文では трябва を 'you must' と訳したのは、да の意味発達にとくに関連が深いのは трябва が 2 人称の да 節をとる場合だという点を強調したかったからである。
32. しかもとくに искам、трябва、мога ли などは日常生活においてきわめて使用頻度が高い。
33. 前田 (2005) で筆者は 'It's not like *p*' の意味発達を置換型憑依の例と分析した。

参考文献

Alexander, Ronalle (2000) *Intensive Bulgarian* 1. Madison, WI: The University of Wisconsin Press.

Anttila, Raimo (1972) *An Introduction to Historical and Comparative Linguistics*. New York: Macmillan.

Austin, John L. (1975) *How to Do Things with Words: The William James Lectures Delivered at Harvard University in 1955* (2nd ed.). Cambridge, MA: Harvard University Press.

Dalzell, Tom and Terry Victor (2006) *The New Partridge Dictionary of*

Slang and Unconventional English. (Two Vols.) London and New York: Routledge.

Eckardt, Regine (2006) *Meaning Change in Grammaticalization: An Enquiry into Semantic Reanalysis.* Oxford: Oxford University Press.

Evans, Nick (1988) "Odd Topic Marking in Kayardild," in Peter Austin (ed.), *Complex Sentences in Australian Languages.* Amsterdam: John Benjamins. 219-266.

Fillmore, Charles J., Paul Kay and Catherine O'Connor (1988) "Regularity and Idiomaticity in Grammatical Construction: The Case of *Let Alone*," Language 64. 501-538.

Givón, Talmy (1995) *Functionalism and Grammar.* Amsterdam: John Benjamins.

Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure.* Chicago: The University of Chicago Press.

Gordon, David and George Lakoff (1975) "Conversational Postulates," in Peter Cole and Jerry L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics* 3*: Speech Acts.* New York: Academic Press. 83-106.

Green, Georgia (1989) *Pragmatics and Natural Language Understanding.* Hillsdale, NJ: Lawrence Ealbaum Associates, Publishers.

Halliday, M. A. K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar.* (2nd ed.) London: Edward Arnold.

Hock, Hans H. (1991) *Principles of Historical Linguistics* (2nd ed.), Berlin: Mouton de Gruyter.

Holman, Michael and Mira Kovatcheva (1993) *Bulgarian.* London: Hodder & Stoughton.

Hooper, Paul and Elizabeth C. Traugott (2003 [1993]) *Grammaticalization.* (2nd ed.) Cambridge: Cambridge University Press.

Kay, Paul (1978) *Words and the Grammar of Context.* Stanford: CSLI.

Levinson, Stephen C. (1983) *Pragmatics.* Cambridge: Cambridge University Press.

前田　満 (2005)「感情の should 再考」『英語と英米文学』40: 15-42.

Maeda, Mitsuru (2006a) "The Development of Interrogative Exclamatives in English," ms. Yamaguchi University.

前田　満 (2006b)「脱従属化」, ms. Yamaguchi University.

Marchello-Nizia, Christiane (1992[1979]) *Histoire de la Langue Francaise aux XIVe et XVe Siècle.* (2nd Ed.) Paris: Dunod.

松永緑彌 (1991)『ブルガリア語文法』東京：大学書林.

McMahon, April M. S. (1994) *Understanding Language Change.* Cambridge: Cambridge University Press.

目黒士門 (2000)『現代フランス広文典』東京：白水社.

Morgan, J. L. (1978) "Two Types of Conventions in Indirect Speech Acts", in Pete Cole (ed.), *Syntax and Semantics* 9: *Pragmatics*. New York: Academic Press. 261-280.

Papantchev, George D. (1994) *Colloquial Bulgarian: A Complete Language Course.* London and New York: Routledge.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1972) *A Grammar of Contemporary English.* London: Longman.

Ramat, P. (1993) "Negation," in R. E. Asher (ed.), *The Encyclopedia of Language and Linguistics*. Oxford: Pergamon Press. 2769-2774

Sag, Ivan A. (1980) *Deletion and Logical Form.* New York and London: Garland Publishing, Inc.

Searle, John R. (1969) *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language.* Cambridge: Cambridge University Press.

Searle, John R. (1989) "How Performatives Work," *Linguistics and Philosophy* 12. 535-558.

Stern, Gustaf (1931) *Meaning and Change of Meaning, with Special Reference to the English Language.* (Reprint.) Westport, CONN: Greenwood Press, Publishers.

Sweetser, Eve (2000) "Blended Spaces and Performativity," *Cognitive Linguistics* 11. 305-333.

寺澤芳雄 (1997)『英語語源辞典』東京：研究社.

内田　恵・前田　満 (近刊)『語用論』東京：英潮社.

Ullmann, Stephen (1962) *Semantics: An Introduction to the Science of Meaning.* Oxford: Basil Blackwell & Mott Ltd. (池上嘉彦訳 (1969)『言語と意味』東京: 大修館.)

Wartburg, von Walther (1934) *Evolution et Structure de la Langue Francaise.* Berlin: Teubner.

Wierzbicka, Anna (1987) *English Speech Act Verbs: A Semantic Dictionary*. New York: Academic Press.

Wierzbicka, Anna (1988) *The Semantics of Grammar*. Amsterdam: John Benjamins.

山崎紀美子 (1985)『現代ブルガリア語』東京：くろしお出版.

＜英語辞書＞

CCD = *Collins Cobuild Advanced Learner's English Dictionary* (New Edition).

LDCE[4] = *Longman Dictionary of Contemporary English* (4th Edition).

OALD[6] = *Oxford Advanced Learner's English Dictionary* (6th Edition).

SRD =『ランダムハウス英語辞典(CD-ROM 版)』